

アクティブラーニングプログラム「FIRST」で学生は何を どう学びどのように変化したか ～2010年秋 FIRST 参加学生の追跡調査より～

秦 喜美恵・板井 芳江・片山 智子・清水 昭子・住田 環⁽¹⁾

アブストラクト

2010年秋に実施した「FIRST」参加者5名に対し、プログラム終了6か月後にこのプログラムでの体験と自分自身を振り返ってもらうためのインタビューを実施した。そのインタビューから参加者の語りを記述し、「グループ活動に対する考え」「日本語使用」「日本あるいは日本人に対する意識」「自己変容」に注目して分析を行った。その結果を「協同学習」の基本条件である①肯定的相互依存、②促進的相互交流、③個人と集団の責任、④集団作業スキルの発達、⑤グループの改善手続き、の5つに照らし合わせ考察した。課題や目標が共有され相互信頼が構築されたグループでは、お互いの状況をより理解し、学び合うことが可能になり、目標達成に向かうためのメタ認知レベルからのコミュニケーション・スキルの調整がなされていることが明らかになった。この調整プロセス自体が主体的かつ積極的な学習であると言える。プログラム終了から時間をおいてインタビューを実施したことで、参加者自身がプログラム直後にはわからなかった自分の変化に気づいたところもあり、プログラム終了後の追跡調査の重要性が示唆された。

キーワード：アクティブラーニング、自己変容、協同学習、フィールド型体験学習、主体性

1. はじめに

近年、大学全入学時代を迎えて教養教育の重要性が見直されるようになり、学士力の質の向上と同時に自律性や主体性、問題解決力やリーダーシップ力に関わる社会人基礎力の育成が言われるようになってきた。社会が求める人材として、「21世紀を生き抜く次世代育成のための提言」（日本経済団体連合会，2004）では「与えられた知識だけに頼るのではなく、物事の本質をつかみ、課題を設定し、自ら行動することによってその課題を解決していける人材を育成することが急がれる」と述べられている。大学における教育の質の保証が問われる中、教育力を上げる教育方法として「学習者中心の教育」に関心が高まってきており、多くの大学でアクティブラーニングを取り入れた授業が行なわれるようになってきた。

アクティブラーニングとは能動的な学習という意味で、伝統的な「講義型」の授業とは異なる「学習者参加型・体験型」授業を指し(Bonwell and Eison, 1991)、その形には課題研究を行う、授業に対するコメントや質問を書く、ディスカッションやプレゼンテーションを行うなど様々なものがある。そして、その活動の方法としてグループワークを取り入れた「協同学習」が多く用いられており、「協同学習」を通して学習者は自然に積極性を発揮し、それぞれの学びを得るとされる(Meyers and Jones, 1993)。Johnsonら(1993)はこの「協同学習」を「スモール・グループを活用した教育方法であり、生徒たちが課題と一緒に取り組むことによって自分の学習と互いの学習を最大限に高めようとする」ものであると定義し、さらに、その基本条件として、①肯定的相互依存、②促進的相互交流、③個人と集団の責任、④集団作業スキルの発達、⑤グループの改善手続き、の5つの条件(Johnson, Johnson, & Smith: 1998)を挙げている。つまり、「協同学習」が単にグループで学習することを指すのではなく、それ以上の学習の促進を目指した構造化された活動であることを示している。

「協同学習」の意義や手法に関する研究、およびその実践報告は、これまでに日本でも多く発表されている(山田・猪木(2004)、津村(2005, 2006, 2007)、石田・鈴木(2006)、安永(2009)、長濱・安永(2010)、河合塾(2011))。しかし、実践そのものの研究は多く報告されているが、学習者にどのような気づきがあり、その気づきから何を学び、その後どのように変容していったのかについて、実践活動の過程そのものに視点をおいた研究は少ない。

立命館アジア太平洋大学では、約40のアクティブラーニングプログラムが実施されており、初年次学生を対象に行っているFIRST(Freshman Intercultural Relations Study Trip)もその一つである(FIRSTの詳細は巻末資料参照)。FIRSTの目的は、訪問地でのアンケートなどを媒介に現地の人々と触れ合い、異文化体験および協同学習を通して異文化理解を促進し好奇心や積極性を育成することである。ある一定の視点をもってその社会・文化を観察することを目標

に、事前授業でリサーチ・クエッションを設定し、4～5名でグループを編成してアンケートやリサーチを行うフィールド型体験学習⁽²⁾の「協同学習」である。

これまで実施された FIRST の参加者のその後の変容を知るための調査は実施されておらず、FIRST で学んだことがその後の学生生活にどのように活かされているかということは明らかではない。そこで、本研究では FIRST 実施から6か月後に振り返りインタビューを実施し、参加者が FIRST の課題達成の活動を通じて、何に気付いて何を学び、その後どう変容していったかについて、参加者のその後を探ってみた。

2. 研究の目的

参加学生に対して行ったインタビューを基に、FIRST に参加前と参加後でどのような変化があったのかを分析し、FIRST プログラムで得られた学びに関して、何をどのように学んだのか、その過程を検証し、今年度(2011年度)秋にも予定されている同プログラムに向け、より学びを深めるための仕掛け作りを検討していくものである。さらに研究により、アクティブ・ラーニング終了後、時間をおいて成果を振り返り検証することの意義を明らかにし、今後の APU のアクティブ・ラーニングの質を高めていくために役立てたい。

3. 研究の方法

2010年秋の FIRST 参加学生 19名のうち、依頼に応じてくれた学生 5名にインタビューを実施した⁽³⁾。インタビューは FIRST の実習の際に学生を引率した教員と日本語教員の2名で行った。半構造的インタビューを用い、言語は基本的に日本語を使用した。必要に応じて英語も用いた。インタビュー実施時間は、約30～50分程度で、音声は本人の承諾を得た上で IC レコーダーに録音した。

【インタビュー対象者】

データ名	出身地域・国籍	性別	参加時の日本語レベル
参加者 A	ノルウェー	男	初級
参加者 B	台湾	女	上級
参加者 C	インドネシア	女	中級
参加者 D	インドネシア	女	初級
参加者 E	インドネシア	男	初級

【インタビュー実施期間】

2011年5月下旬～2011年6月下旬

【インタビュー内容】

- ① FIRST に参加する前と参加後とで、何か自分に変化があったと思うか。
 - ・何が、どのように変わったのか。
 - ・FIRST のどんな体験が、あなたを変化させたのか。
- ② ①で答えた内容を深めながら、主に学習面、生活面から質問していく。
 - <学習面>
 - ・日本語について
 - ・グループ活動について
 - ・学習態度
 - <生活面>
 - ・人間関係、人との接し方など(友だち、日本人、サークル、イベント、地域との関わりの中で)
 - ・日本に対する思い
 - ・将来について(意識や態度に変化があったか)
- ③ プログラム自体に対する感想
 - ・FIRST のよかった点
 - ・改善してほしい点(期待していたけれども、期待はずれだった点など)
 - ・今後の FIRST に期待したい点

4. 結果と分析

インタビューから参加者の語りを記述し、FIRSTに参加する前と参加した後で参加者に顕著な変化があったと思われる4つの点「グループ活動に対する考え」「日本語使用」「日本あるいは日本人に対する意識」「自己変容（参加者自身の態度や内面の変化）」に注目して、その分析を行った。

4.1 グループ活動に対する考え

FIRSTの参加者は全て1回生の学生で、APUに入学する前までは、ほとんど「グループの力」、言葉を変えれば「協同学習」を体験したこと無かった学生たちである。そのような学生たちが、3泊4日の実習と、事前の準備、事後の振り返りを含めた6週間で、グループ活動を通じて得たものは、企画側が期待していた以上に大きなものであった。以下に、3名の学生の語りを紹介する。

(参加者A)

・チームワークの経験もできた。毎日はチームメンバーとずっといっしょにご飯を食べて、アンケートの答えをディスカッションしたりした。実習の前には、毎日曜日、毎水曜日ミーティングした。チームワークの経験が、たぶん一番得たものだった。

・チームワークのスキルを学んだ。例えばグループのメンバーの考えは大切なこと、僕の考えだけでなく、他の人の考えを尊敬できるようになった。

・研究することは大変だから、前向きな人、前向きな態度が必要だと思う。ずっと楽しんで研究した。いいグループだった。

・他の授業のグループ活動と違い、活動そのもの、またグループメンバーとの関係がとても深かった。他の授業では、グループ活動といってもパワーポイントを作って、教室で発表するだけで浅くて、グループ活動から得るものはあまりなかった。FIRSTに参加してからは、大学内だけに限らず、周囲の人の発言に耳を傾けるようになった。

(参加者B)

・みんな違うところから来ているし、その人たちを理解するのが最初大変だった。

・ミーティングするときの能力がついた。皆が意見バラバラになるときや、自分の意見を強く持っている人をどうやって説得するか、について学んだ。

・グループ内で意見が対立したときなど、仲裁の役目ができるようになった。前よりもそういう役割で動くことが上手になった。ある人の意見の後ろにある考えがわかるようになったような気がする。

・いっしょにがんばった、っていう絆が、どこかから、いつの間にか入ってきた。

・自分はリーダータイプの人だと思ったけど、本当のリーダーは、自分が他の人の分までやってしまうのではなく、どうやって皆で分担して仕事をするか、を考える人で、それが大事なことだと分かった。

(参加者C)

・アンケートが皆より遅くなったとき、グループの皆は終わるまで待っていてくれた。応援やアドバイスをしてくれたので、最後まで頑張ることができた。

・大学の授業でも、グループワークのとき、積極的に自分のできることをやる。よくないグループでも、グループを応援すればよくなるので、自分のできることを一生懸命やって応援するようになった。

FIRSTでは、1つのグループが同じ目標に向かって作業を進めていく。特に実習の3泊4日の間は、終日行動を共にしながらグループで考え、判断し、作業を遂行していかなければならず、何が起ころうと逃げることのできない状況である。そのような状況の下で、参加学生たちは同じ目標に向かっていてお互いに励まし合い、グループメンバー間の異なった意見を調整しながら、グループとして自分たちに課された課題、難題を乗り越える力を身につけていって

いることがわかる。つまり、最終的には個人間の様々な相違を越えた交わりの中でのお互いの学び合いを通して、達成感が得られていると言えるだろう。

4.2 日本語使用

①日本語使用に対する意識

インタビューした学生は上級、中級の学生1名ずつと初級の学生3名であったが、全員が日本語力がアップしたと認識しており、日本語を話すことに自信が持てるようになった、日本語力が上がったと述べている。以下に日本語使用に関わる語りを紹介する。

(参加者A) FIRSTの後、自信がついて、自分からの表現ができた。

(参加者B) (前は) 文法を考える前に、言う勇気が必要だった。

(参加者C)前は、考えて、言う方法ができなかつたら黙ってしまった。今は頭に意見があつたら、言えるようになった。

(参加者D)前は日本人と話すときは怖い、自信がなかった。今は日本人の友だちとよく話すようになった。

FIRSTには「日本語で100人と話す」というタスクが仕組みれており、この実践を通して、学生たちは日本語を使わなければならない状況に追い込まれる。タスク達成のために断られても断られても果敢にアタックしていくことで、初めは挫けそうになりながらも次第にその気持ちが克服でき、その結果、正しい日本語で話さなければならないという心のバリアが取れたのではないかと思われる。

②言語スタイルの使い分け

学生の日本語力に関し、日本語習得の観点から特筆すべき点は、初級の学生が敬語(ここでいう敬語とは、文末を「～です」「～ます」で話せることを指す)と普通体の使い分けができるようになったと述べている点である。

(参加者D)今は、「ですます」の文法を使って話すことができる。

(参加者E) Polite Form が使えるようになった。

一般的に敬語と普通体の使い分けが意識してできるようになるのは学習の上級段階に達してからであることを考えると、初級レベルの学習者で使い分けが可能になるのは驚くべきことである。APUの初級授業では敬語と普通体とを知識として学習し、地域住民との交流会、会話の試験などの公的な場では敬語で話すように指導し、学生も実践している。だが、それ以外の場、たとえば、授業後の教師との会話では普通体になりがちである。しかし、FIRSTでは学生が町に出て、初めて会った日本人に話しかけなければならない、必然的に敬語を使う場面に繰り返しさらされる。つまり、頭の中で理解されていた二つの使い分けが、必要に迫られて体得されたといえるのではないだろうか。

4.3 日本あるいは日本人に対する意識

APUは在学生の半数を留学生が占め、日英二言語で教育が行われている。参加者は、来日後2ヶ月足らずでFIRSTの実習を体験しているが、実習前は日本でありながら、APUという多文化環境の下で過ごしていた学生たちである。しかも、APUの所在地である別府市はもともと観光地であることと、また小さいながらも外国人人口の割合が高い(人口12万人に対して外国人約4,000人:2011年8月23日現在)に対する寛容な態度が養われている場所である。別府のAPUという狭い日本しか知らなかった学生たちは、FIRSTに参加したことにより、初めてリアルな日本を体験したと言える。インタビューの中から声をひろってみたい。

(参加者A)日本人はポライトだ。でも、道で忙しそうに日本人が歩いていて、話しかけるとポライトじゃないときがある。例外がある。日本人はみんな同じ性格じゃない。

(参加者B)APUだけではフェイクの日本。

(参加者C)APUの日本人と本当の日本人は違う。

(参加者D)rejectionが大丈夫になった。Noと言った人にもsmile、ありがとうございますと言えるようになった。

(参加者E)おばあさんたちによく怒られたから、もっと自信がついた。

前述したように、実習期間中、学生たちは「100人の日本人と話そう!」をキャッチフレーズに、知らない日本人に声をかけてアンケートへの協力を依頼して歩いたのだが、その100人と話すまでに、数多くの“rejection(拒否)”に遭っている。別府での大学生活では経験したことのなかった拒否反応にとまどい、精神的にかなりダメージを受けた学生もいたようだ。実際の日本は、教科書で習った日本、自分が持っていた日本や日本人のイメージとは異なっていたわけで、その現実を体験して学生が得たものは、この先、彼らが日本で生活していく上で必要な「自律」につながっていくものだと考える。

APUの場合は、90以上の国や地域から学生が集い、英語だけで生活できるという特殊な環境であるがゆえに、なかなか大学生活の中に「日本」が取り込めないのが実状である。そのような環境であるからこそ、APUにおけるFIRSTプログラムの意義は大きいと言えよう。

4.4 自分変容(参加者自身の態度や内面の変化)

「FIRST」による「協同学習」体験は、参加学生たちが自分自身を見つめ直す機会となっていた。中には性格をも変えるきっかけとなった学生もいた。その変化には、実習中から自分で気がついていたものもあれば、この体験が影響し、プログラム終了後に実際の行動となって表われたものもあった。以下、それを表す語りを紹介する。

(参加者C)

- ・全体の性格が変わった。前は、ちょっと暗かったが、FIRSTははじめての一步になった。
- ・FIRSTは大変だけど、自分の能力を信じたらできるようになると思うようになった。
- ・忙しいけどセルフマネジメントができるようになった。
- ・プレゼンも上手になった。(FIRST後の授業でのプレゼンについて)FIRSTの前は交流イベントをしたとき、国について発表して失敗だったが、今回は同じ国についての発表だったがうまくいった。もっと楽しくできるように工夫するようになった。
- ・もっと積極的になった。積極的にいろいろしたいと思った。FIRSTの後いろいろなイベントに参加するようになった。地域交流もいろいろ参加した。FIRSTの前は、APUでいろんなチャンスがあると知っていたが、自信がなかったので参加しなかったが、後は積極的にどんどん参加するようになった。

(FIRSTで大変だったときの)気持ちを思い出して、もう一度その気持ちになりたいと思った。

- ・RA(APUの寮の学生アシスタント)の面接も緊張もあまり感じなかった。自分を信じて。前だったら緊張していただろう。
- ・日常生活は暗いけど、イベントのときはスイッチして、できるようになった。イベントのときはパフォーマンスができるようになった。

(参加者D)

- ・前は日本人と話すとき怖かった。自信がなかった。後は日本人の友だちともっと話せるようになった。
- ・最後のプレゼンテーションでロータリーの人たちの前で発表したとき、とてもproud。誇りに思った。(このことが影響して)日本人の友だちと話すと、もっと自信がもてるようになった。間違いを怖がらない。
- ・年寄りの人と話すときは、気持ちを出すことが大切だとわかった。分からない時一番大切なことは気持ちを表すこと。

(FIRSTの後も)知らないおばさんに大学の食堂で名前を聞かれた時、自分の気持ちを出して話すことができた。FIRSTの経験を思い出したからだと思う。

両者とも、FIRSTで苦労した体験の成果として、困難を乗り越えるためのストラテジーと、困難が克服できたという自信を手に入れ、プログラム終了後6ヶ月を経て、同様の状況下におかれてもFIRSTの経験を思い出して自信を持って対応できるようになっているようだ。また、「もう一度その気持ちになりたい」と様々な活動に積極的に挑戦しているようだ。

プログラム終了直後にはぼんやりとしか感じなかった変化のイメージが、時間が経過する中で整理され、客観的に自分を見つめ直して語られていた。また、FIRST の与えた影響とその効果が行動として目に見える形で表れていることが分かった。

5. 考察

参加学生は、プログラム終了直後に行った自己評価アンケートを通し、すでに自身の振り返りとプログラムへの評価を行っている(秦 2011)が、FIRST 終了後6か月を経た時点で今回のインタビューは、改めて参加者自身とプログラムを振り返り、彼らの変容およびプログラムで得た学びを再確認する意味もあった。上記のインタビュー結果から、参加者が FIRST での苦労や大変さを経て自己変容し、FIRST での学びがその後の大学生活に確実に活かされていることが明らかになった。このことを、「協同学習」の5つの原則の視点から考察する。さらに、コミュニケーション・スキルの発達の視点からも考察を加える。

5.1 「協同学習」の5つの基本条件の観点から

FIRST は3泊4日を通してグループで活動し課題、目標を達成しなければならない。プログラムの途中でやめることができない構造になっているため、グループメンバーはどんな困難もグループで協力し合い、乗り越えなければならない。このような状況の下では、「協同学習」ならでは、相互信頼に基づいた人間関係が構築されるのみならず、グループのために自分も役に立つという実感を得ることができる場が生じている。特に興味深いことは、グループメンバーの一人一人が、目標達成だけを目指しているのではなく、グループの内部で起こっているプロセス(グループに何が起こっており、皆がどう感じているのかなど)にも関心を持ち、お互いを分かり合うための取り組みが行われていることである。そこには、グループ内で自由に意見を言い合い、お互いに自分の気持ちを出し合える安心できる環境がある。

信頼関係が築かれているグループでは、何か問題が生じた場合にも、グループ内でそれを共有し、お互いに助け合うことができ、また対話や話し合いを通して自分のやり方を振り返り、他の人の視点や考え方を学ぶことができる。つまり、一人では気づきにくい自分のやり方やパターンを認識し、意識化できることで、新たな取り組みの可能性が開かれる。課題にのみ集中してその難しさにとまどっていた学生が、その課題をどう解決するかということに意識を向けるようになる。つまり、視点が「課題、目標達成」から「課題、目標達成の仕方」へと移行し、メタ認知レベルで自分をとらえられるようになることによって、問題解決に向けて積極的な姿勢や主体性が生まれるということである。

以上のことから、FIRST は、前述した「協同学習」の5つの基本条件(①肯定的相互依存、②促進的相互交流、③個人と集団の責任、④集団作業スキルの発達、⑤グループの改善手続き)をすべて満たしていると言えよう。

5.2 「コミュニケーション・スキル」の観点から

「4.2 日本語使用」の結果と分析で述べたように、FIRST ではフィールドドリサーチの手法を用いることで、日本語の授業だけでは身につけることができないコミュニケーション・スキルを獲得する機会が持てることが明らかになった。

日本語の授業では、学習した表現を正確に使うことが目標になり、教師から与えられた場面でその表現を使うためのタスクが多く用いられる。それに対して、FIRST では「日本語で100人と話す」というタスクを達成するために、学生たちは日本語を使う必要がある状況に追い込まれ、町に出て初めて会った日本人に自分から話しかけなければならない。そこで、必然的に、状況に応じた適切な日本語を自分たちで生み出すことが求められるのだ。つまり、必要に迫られて、頭の中の知識でしかなかった日本語を、実際の場面で適切な用い方をするために調整できるようになったといえるのではないだろうか。また、正しい日本語で話すことができなくてもアンケート調査という目標が達成できるという経験を繰り返したことで、コミュニケーションとは、正しい日本語を話すことが目的ではなく、言いたい内容を伝えることであることに気づき、自信が生まれたのだと思われる。

6. 振り返りの必要性和今後の課題

本研究では、FIRST 終了の6か月後に振り返りのインタビューを行った。その結果、振り返りの重要性、特に時間を置いて改めて自分の経験を振り返ることの意義が明らかになった。

まず、体験したことを振り返りそれを言語化することで、困難なことにも乗り越える価値があることを認識できる。

さらに、時間をおいて振り返ることで初めて分かることもある。過去に体験し気づいたことや学びが、実際に自分の中でどのように役に立ち、活かされているかということが明確になり、自分の変容のプロセスを構造化できる。そして、経験の価値を再評価できるのである。このような振り返りを行うことで、今後たとえ困難な経験をするようになって、それがその先の自分の成長をもたらす可能性になるのだとして、前向きにとらえられるようになるだろう。つまり、経験の価値に気付くことで、物事に前向きな気持ちで積極的に取り組めるようになるのではないだろうか。以上の点から、時間をおいて体験を振り返ることの価値を再認識した。

また、本稿では言及しなかったが、FIRSTに参加した日本人TAの役割の重要性も見逃せない。インタビューを通し、日本人TAの存在が参加者のモチベーションの維持や達成感に大きく影響していることも再確認できたので、今後は「協同学習」におけるTAによる支援の在り方の観点からもFIRSTを検証することが不可欠であると考え、今後のFIRSTで継続して検証していきたい。

注

- (1) 主筆、秦。以下、50音順。
- (2) クループの人間関係に焦点を当てたラボラトリ方式の体験学習に対し、協同学習は課題解決過程で起こるグループ・メンバー間のさまざまな対人的相互作用のあり方をプロセスの問題として取り上げるので、フィールド型の体験学習と呼べるかもしれない(石田・鈴木:2006, p.18)
- (3) インタビュー内容を研究データとして使用することについては、5名のインタビュー対象者の承諾を得ている。
- (4) 国籍は日本であるが母語はインドネシア語であるため、本学では日本語を学習している。

参考文献

- 石田裕久・鈴木稔子(2006)「協同学習の考え方と「協同」を学ぶ授業実践」『Human Relations 人間関係研究』第7号、15-30. 南山大学人間関係研究センター
- 河合塾(2011)『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか 一経済系・工学系の全国大学調査から見えてきたこと』東信堂
- 秦喜美恵(2011)「異文化体験学習プログラム「FIRST in Kyusyu」実践報告 ～教室外での日本語実践と多文化協同学習を通しての学び～」『ポリグロシア』第20巻、145-154. 立命館アジア太平洋大学言語教育センター
- 津村俊充(2007)「3つのグループワークの誕生と展開 およびグループワークの効果メカニズムとその測定の試み」『Human Relations 人間関係研究』第6号、30-47. 南山大学人間関係研究センター
- 津村俊充(2008)「自己変革のためのアクションリサーチ「セルフ・サイエンス」～認知行動療法の原理を活用して～」『Human Relations 人間関係研究』第7号、54-67. 南山大学人間関係研究センター
- 津村俊充(2009)「プロセスからの学びを支援するファシリテーションーラボラトリ方式の体験学習を頂点としてー」『Human Relations 人間関係研究』第8号、30-67. 南山大学人間関係研究センター
- 長濱文与・安永悟(2010)「大学生の協同作業に対する認識の変化 一対話中心授業と講義中心授業を対象に一」『Human Relations 人間関係研究』第9号、35-42. 南山大学人間関係研究センター
- 日本経済団体連合会(2004年4月19日)「21世紀を生き抜く次世代育成のための提言ー「多様性」「競争」「評価」を基本にさらなる改革の推進をー」<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2004/031/honbun.html> (2011年7月14日アクセス)
- 日本経済団体連合会(2011年6月14日)「グローバル人材の育成に向けた提言」<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/062/index.html> (2011年7月14日アクセス)
- 安永悟(2009)「協同による大学授業の改善」『日本教育心理学会』48, 163-172.
- 山田智美・猪木省三(2004)「大学の授業における協同学習の有効性」『県立広島女子大学生活科学部紀要』10, 73-79.

- Barkley, E. F. (2004) 『協同学習の技法 大学教育の手引き Collaborative Learning Techniques』安永悟訳 (2009) ナカニシヤ出版
- Bonwell, C. and Eison, J. (1991). Active Learning, *Creating Excitement in the Classroom AEHE-ERIC Higher Education Report No. 1*. Washington, D.C.: Jossey-Bass.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T and Holubec, E. J. (1993) *Circles of Learning, Cooperation in the classroom*, Interaction Book Company (杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳 1998 『学習の輪：アメリカの協同学習入門』二瓶社)
- Williams, D. L., Beard, J. D., and Rymer, J. (1991, Summer) Team projects, *Achieving their full potential*. Journal of Marketing Education, 12, 45-53.

【巻末資料】2010年度秋学期「FIRST in Kyushu」の実施内容

[実施期間と参加者]

プログラム期間：2010年10月20日(水)～12月1日(水)

実習期間：2010年11月20日(土)～11月23日(火)(3泊4日)

参加学生：19名(男5名、女14名)
 <日本語レベル>初級(15名)、中級(3名)、上級(1名)
 <出身国・地域>インドネシア(6名)、中国(6名)、ドイツ、アメリカ、タイ、シンガポール、ノルウェー、台湾、日本⁽⁴⁾(各1名)

実施形態：グループ討議とフィールドリサーチおよびオリエンテーリング

担当教員：1名

日本人TA：4名(男女各2名ずつ)

[授業/実習スケジュールと内容]

授業/実習		日時	内容
参加者が1週間		10月20日(水)4限	オリエンテーション、TA紹介 プログラムにかかわる事務連絡
事前授業	1	10月27日(水)6限	グループ分け、アイスブレイキング、調査地の決定 日本語の学習：調査地の宿泊施設を調べて日本語で宿の予約 課題：調査地について調べる
	2、3	11月3日(水)6・7限	各グループの調査地の概観まとめおよびプレゼンテーション、 日本語の学習：プレゼンテーションで日本語を使ってみる 課題：各グループで話し合いリサーチ・クエッションを考える
	4、5	11月10日(水)5・6限	各グループのリサーチ・クエッションの設定およびプレゼンテーション 日本語の学習：各グループでアンケートを依頼する際の日本語のフレーズを作成 課題：日本語でのアンケート作成
実習	1日目	11月20日(土)	別府出発、オリエンテーション、フィールドリサーチ
	2日目	11月21日(日)	フィールドリサーチ、オリエンテーリング
	3日目	11月22日(月)	フィールドリサーチ、オリエンテーリング

	4日目	11月23日(火)	フィールドリサーチ、オリエンテーリング 別府着
事後授業	1、2	11月24日(水) 5・6限	実習の振り返り討議、プレゼンテーションの準備
	3	12月1日(水) 5・6限	プレゼンテーション、アンケート 課題：振り返りレポート

【実習の目標】

- ① 日本語能力を高めるためにできるだけ多くの日本人と話をする。目標 100人。
- ② リサーチ・クエッションに基づいてアンケート調査を実施し、日本について理解を深める。
- ③ グループワークを通してお互いに学ぶことができるようになる。
- ④ 自分たちだけの力でフィールドリサーチを実施する。

【グループ編成および調査地とリサーチ・クエッション】

グループ	参加者の出身地	調査地	リサーチ・クエッション
① 5名	タイ1、中国2、インドネシア1、日本1	大牟田／佐世保／福岡	「欧米文化に影響されている地域の住民(佐世保)は影響されていない住民(大牟田)より、外国人に親切だ」
② 5名	ノルウェー1、シンガポール1、中国1、インドネシア2	飯塚／有田／福岡	「働いている高齢者と退職した高齢者とではどちらがもっと満足しましたか？」
③ 5名	ドイツ1、中国2、インドネシア2	唐津／諫早／福岡	「唐津と諫早コミュニケーションの電子化が進んでいるのはどっちだ!？」
④ 4名	アメリカ1、中国1、インドネシア2	久留米／伊万里／福岡	「都市の観光～久留米と伊万里の比較～」